

【入選】

水について考える

岩沼市立岩沼中学校

三年 合 田 祥有未

「令和の米騒動」とよばれた去年の米不足、当たりまえの存在、米が高級品になっていた。ため息をつく母の姿とグチはだいぶ聞き飽きたように思う。そんな中、母方のおじさんから田植えの手伝いをしてくれないか、と連絡が来たので母と私で手伝いに行く事にした。私に何か手伝えることがあるだろうかと不安だったが、初回は準備だ。苗床を作るための場所の掃除や器具を洗い、たくさんの農機具がある場所を眺めるのが精いっぱいだった。

田植えと聞くと泥の田んぼに入って苗を手で植えていくイメージがあるが、それは準備が整ってからで、まずは苗が必要だ。苗を育てるためには土と種と水が必要で、更に肥料を絶妙な配合で混ぜ込んでそれを薄い箱の中に入れていくのだ。私はその土を大きなスコップで機械のそばまで運ぶ担当をした。

いつもは高齢のおじさんとおばさん、親戚同士で協力し合うのだが、この春におばさんが亡くなり全員悲しい気持ちの中、おばさんがいかに働き者でたくさんの仕事をしていたのか全員身に染みてわかったのだ。

少しでもみんなが明るい気持ちになるように私は一生懸命手伝い、稲の芽がでてるのを楽しみに待つことにした。

そこから二週間ほど経ち、いよいよ田植えをするというのでまた実家に向かった。苗がどうなっているか気になって、私はビニールハウスへ急いで走った。中にはホースで水をまいているおじさんの姿があり私はきれいな緑のじゅうたんを見ながら

「苗の具合はどう?」

と声をかけた。

「さゆが手伝ってくれたからバッチリだ」

と嬉しい声が返ってきた。その日はハウスから軽トラに苗を一枚ずつ運び入れ、田んぼに移動して田植え機にセットをする、空になった箱を用水路で洗い片づけていく、これを果てしなく繰り返すのだ。

難しいことではなかったが大切な仕事で、どう考えても一人では出来ない。農業は過酷だし大変な仕事だとよく分かった。一日がかりで必死に手伝った結果、茶色一色だった田んぼに緑の苗が整列していた。私はなんだか誇らしい気持ちで一杯になった。

田植えから稲穂が育つまでの間はたっぷりの水が必要だ。この夏は猛暑の影響で鳴子ダム貯水率ゼロという報道がされ、真っ先に田んぼが心配になった。ゼロということは貯めておける水がないので、調節が難しいということだ。報道を見てから気持ちばかりの節水を私なりにやってみたが、我ながらこれでは遅いとわかっていた。高い、無いと不満ばかりで誰かがなんとかしてくれると思うのはあまりにも無責任だ。必死に知恵を絞る行動している人がたくさんいる。私達がすぐにはできることを探そう。節水だけが解決にならないだろう。水が必要とするのは農業だけではないしどんなことにも水は必要で、そして私たちもまた安全な水を飲み使わないと生きていけない、全てつながっているのだ。下流である私たちが水への気持ちを少しでも意識すれば上流で貯められる量が増える、限りある水が巡り巡って自分の元に戻ってくるのではないだろうか。

ダムの水は危機的だったが、田んぼへの水不足はなんとか乗り切ったそう。だ。たくさんの人が努力し、どんなに大変だったろうと頭が下がる思いだ。実家の田んぼは稲穂がふくらみ黄色く実ってきた。大切な水を使って作った米ができあがるのはもう少しだ。私が手伝ったのはほんの少しだが、それでも水という資源を守り調節してくれているたくさんの人への感謝の気持ちを再確認できた。これからは一滴の水と、この気持ちを大切に